

平成 23 年度 病害虫発生予察 特殊報 第 1 号

病害虫名： アヤトビムシ科（アヤトビムシ属）の一種
Entomobrya unostriigata STACH, 1930

対 象： コマツナ

1. 特殊報の内容

アヤトビムシ科(アヤトビムシ属)の一種の発生と被害を都下で初めて確認した(江戸川区内)。

2. 発生経過

- (1) 2009 年5~6月頃、東京都江戸川区内のコマツナ栽培施設圃場において、地表部や地中にトビムシの一種の多発生を確認したが、その時点では被害は確認されなかった。2010 年6~8月頃に、同地域の2軒の施設圃場でこのトビムシによる被害を確認したため、標本を鳥取県立博物館の一澤 圭 氏に送付し、本種と同定された。
- (2) 本種は地中海周辺部、北米、オーストラリアに分布する。北米とオーストラリアでは移入種と見なされ、大発生してワタなどに農業被害を与えている。我が国では過去に本種と確認できる記録がなく、本報が初の報告となると思われる。なお、一澤 氏は 1996 年に横浜市で本種を1個体採集している。
- (3) 現在までに、東京都江戸川区内のコマツナ栽培施設圃場の多くで本種の発生が確認されているが、被害の報告は少ない(キスジノミハムシの被害と混同している可能性もある)。

3. 形態 (第4~5図:成虫)

- (1) 大型個体では、触角を除いた体長は約 2.5mm。体色は淡灰色~淡青色で、正中線上に濃青色の縦条があり、頭頂部や額にも濃青色の斑紋がある。体色の濃い個体では第4腹節後半にも濃青色の着色が見られる。体色の薄い個体では、正中線上の縦条が不明瞭になる。跳躍器端節の亜端歯が小さく、しばしば見えづらい。

4. 生態

- (1) 主に土壌中や地表面に生息する。森林や草原などさまざまな環境下で記録されるが、北米やオーストラリアでは農耕地や人工的環境からの報告が多い。国内での生活史は調べられていないが、海外での室内実験(室温約 25-30℃)では約1ヶ月で1世代を完了し、また休眠ステージは確認されていないことから、野外でも年間数世代を過ごしている可能性がある。産卵は土壌中や石下などで行っているものと見られる。
- (2) 土壌中の菌類や花粉、植物遺体など様々なものを食べるが、大発生すると農作物を食害する。国内では今回のコマツナへの被害のみであるが、国外ではワタ、トマト、レタス、タマネギへの被害が報告されている。

5. 被害 (第1~3図)

- (1) 生育初期に加害を受けた場合は加害部位が生育とともに拡大し、大きな穴となる(第1図, 第2図)。生育中の加害は葉の裏から舐食し、表皮が残るがやがて穴があく(第3図)。

6. 防除対策および注意

- (1) 本種に対する登録農薬はないため、晴天日に地表面をポリフィルムで被覆し、太陽熱で土中の温度を高めて防除することが対策として考えられる。
- (2) 本種は植物残渣なども食べるため、圃場には残渣を放置しないように努める。

7. 参考文献 : Greenslade, P. (1995) Bulletin Entomologique de Pologne 64 : 245-259.



第1図 コマツナの被害の初期 (穴が小さい)



第2図 コマツナの被害の末期 (穴が拡大する)



第3図 被害初期には葉裏に本種がいることが多い



第4図 成虫（体長最大約2.5mm. 遠目には灰色に見える. 注：この個体は触角が折れている）



第5図 成虫ならびに跳躍器端節（撮影：鳥取県立博物館・一澤 圭氏）